

赤木桁平

文章——文体・文格



文  
章——文体·文  
格



小説集『鶉籠』うずらかごの序文に於いて、漱石先生は「只文章は趣味を生命とす。文章にして趣味なきは天日の冷やかなるが如し。卒然として存在の価値を失す」と云つていられる。——自分は、漱石先生の所謂文章の趣味なるものが果して何であるかは知らない。併し、最近に於けるわが国多数作家の裡にあつて、先生ほど文章に対して細心な工夫を凝らした人は尠すくなかろうと思う。

普通一般に、ツルゲーネフは文格の純正を以てロシア

文学に重きをなし、フローベールは文体の練熟を以てフランス文学に重きをなしている。先生自身は嘗てヘルンを評し、「ヘルンはスタイリストとして近世の天才である」と云われた。これらの諸大家が各自の国語に対して尽した偉大なる貢献は、直ちに移して以て先生のわが国語に対して尽された貢献に比することが出来よう。疑いもなく、先生は最近のわが国が生んだ唯一のスタイリストであり、その文格の比較的純正にして、且つ、その文体の極めて練熟せることは、わが国文学史中に於いても稀れに見るところである。

既に「業績の概観」に於いても云つて置いたように、先生は当初瑰麗<sup>かいらい</sup>眼を眩すばかりの文章を以て世を驚かした。その文字の彫琢に彫琢を重ね、その語句の洗鍊に洗鍊を加えられた点は、その実質的内容として盛られた口マンチツクな思想と相俟つて、当時の荒涼たる文芸の野に爛漫たる花を咲かせた。嘗てフローベールは、「美しき思想は美しき文体の裡にのみ存し、美しき思想は美しき思想の裡にのみ存す」と云い、また、「ある一個の事象を表現する言葉は、その最も恰好なるのが唯一つあるだけである」と云つて、一字一句の穿鑿<sup>せんさく</sup>推敲に猶お数十

の日子にっしを費したと伝えられているが、先生初期の作品を  
 読んで、その珊々さんさんたる美珠美玉を聯つらねたような文体と思  
 想とに接すると、自分は坐そぞるにフローベールの言葉と態  
 度とを想起せざるをえない。

次ぎに抜抄するのは『虞美人草』の一節である。

紅を弥生に包む昼たけなわ 酣ななるに、春を抽ぬきんずる紫の  
 濃き一点を、天地あめつちの眠れるなかに、鮮やかに滴したたら  
 したるが如き女である。夢の世を夢よりも艶あでやかに眺  
 めしめる黒髪を、乱るるなと畳める鬢びんの上には、玉たま



虫貝むしかいを冴々と董こに刻んで、細き金脚きんあしにはっしと打込  
 んでいる。静かなる昼の、遠き世に心を奪い去ら  
 とするを、黒き眸ひとみのさと動けば、見る人は、あな  
 やと我に帰る。半滴のひろがりには、一瞬の短きを儉ぬす  
 んで、疾風の威を作なすは、春に居て春を制する深き  
 眼まなこである。此瞳を遡さかのぼって、魔力の境きようを窮きわむるとき、  
 桃源に骨を白うして再び塵寰じんかんに帰するをえず。只の  
 夢ではない。模糊たる夢の大いなるうちに、燦さんなる  
 一点の妖星が、死ぬ迄我を見よと、紫色の、眉まゆ近く逼せま  
 るのである。女は紫色の着物を着ている。

静かなる昼を、静かに葉しおりを抽ぬいて、箔しおりに重き一卷を、女は膝の上に読む。

「墓の前に跪ひざまずいて云う。此手にて——此手にて君を埋うずめ参らせしを、今は此手も自由ならず。捕われて遠き国に、行く程もあらねば、此手にて君が墓を掃い、此手にて香こうを焚くべき折々の、長とこしえに尽きたりと思ひ給え。生ける時は、莫ぼく耶やも我等を割き難きに、死こそ無残なれ。羅馬ローマの君は埃エジプト及に葬られ、埃及なるわれは、君が羅馬に埋められんとす。君が羅馬は——わが思う程の恩を、憂きわれに拒める、

君が羅馬は、つれなき君が羅馬なり。去れど、情だ  
 にあらば、羅馬の神は、よも生きながらの辱はずかしめに、  
 市いちに引かるるわれを、雲の上より余処よそに見給わざる  
 べし。君が仇あだなる人の勝利を飾るわれを、埃及の神  
 に見離されたるわれを、君が片見と残し給えるわが  
 命こそ仇なれ。情ある羅馬の神に祈る。——われを  
 隠し給え。恥見えぬ墓の底に、君とわれを永劫に隠  
 し給え。」

『虞美人草』や『草枕』の文章が、概して斧鑿ふさく琢斲の迹

を持つてゐることは既に云つた。茲こゝに抜抄した一節のごときも、素もとよりこの種の欠点を持つてゐるには相違ないが、併し、単に文体の上から云うと、その緻巧彫琢の妙、殆んど神に迫るところがある。殊に、後半に於ける女の読む文章がいい。これは慥たしかメレデイスの文章を訳されたものとか聞いているが、そのスタイルは全然先生自身のものであつて、先生独特の韻律的表現が、心悪にくくまでその特色を發揮している。——『草枕』の第九章にも、同じくこの種の名文があつて、その一節に「エニスエニスは沈みつつ、沈みつつ只空に引く一抹の淡き線となる。線は

切れて点となる。蛋白石とんぼだまの空のなかに円き柱が、ここ、かしこと立つ。遂には最も高く聳えたる鐘楼しゅろうが沈む。……」というところがあるが、この文章の有する面白味なども、その大部分は、矢張この文章の有する一種の音楽的な諧調の上にあるのである。

この点に於いて、先生独特の韻律的表現がその最高調に達しているものは、云うまでもなく『倫敦塔』、『幻影の盾』及び『薤露行』の三篇である。併し、これらの諸作に就いては既に所感を述べて置いたから、茲にて敢て贅説しないことにして、ただ単なる参考のために、『幻

影の盾』の冒頭に於ける一節を抜抄して見よう。

遠き世の物語である。バロンと名乗るものの城を構え濠を環めぐらして、人を屠ほふり天に驕おごれる昔に帰れ。今代きんだいの話ではない。

何時の頃とも知らぬ。只アーサー大王の御代みよとのみ言い伝えたる世に、ブレトンの一士人がブレトンの一女子に懸想したことがある。其頃の恋はあだには出来ぬ。思う人の唇に燃ゆる情の息を吹く為には、吾肱ひじをも折らねばならぬ。吾頸くびをも挫くじかねばならぬ。

時としては吾血潮さえ容赦もなく流さねばならなかつた。懸想されたるブレトンの女は懸想せるブレトンの男に向つて云う、君が恋叶えんとならば、残りなく円卓の勇士を倒して、われを世に類いなき美しき女と名乗り給え、アーサーの養える名高き鷹を獲<sup>え</sup>て吾許<sup>もと</sup>に送り届け給えと。男心得たりと腰に帯びたる長き劍<sup>つるぎ</sup>に盟<sup>ちか</sup>えば、天上天下に吾志を妨ぐるものなく、遂に仙姫<sup>せんき</sup>の援<sup>たすけ</sup>を得て悉く女の云う所を果す。鷹の足を纏える細き金<sup>きん</sup>の鎖の端に結びつけたる羊皮紙を読めば、三十一カ条の愛に関する法章であつた。

所謂「愛の序」の憲法とは是である。……楯の話しは此憲法の盛んに行われた時代に起った事と思え。

併し、先生の文章は漸次に変つて来た。そして、文字や語句の上に存する絢爛瑰麗な色彩が薄れて行くとともに、何となく平淡清澄な調子を加えて行き、且つ、その韻文的な文体は散文的に變じ、その浮華な文格は簡素に移つて、そこに初めて實際に先生を代表すべき文章が出来上つた。古い言葉を借りて云うと、こは蘇軾そしよくの所謂「漸く古い、漸く熟し、乃ち平淡に造る。その実はこれ平淡



に非ず。乃ち絢爛の極なり」であつて、先生晩年に於ける文章は、先生生涯に於ける文章の、最も精鍊せられ、且つ、最も淨化せられたものだと言つていい。

今日にして見ると、先年の文章は、『虞美人草』と『坑夫』との間で一躍し、また『三四郎』と『それから』との間で一躍している。『門』に至つては既に先生後期に於ける文章は殆んど完成の域に到達していると云つてもいいが、それが『行人』、『心』などを経過して『道草』、『明暗』などの文章に至ると、ますます簡淨かんじようそうこ蒼古の渋味いぶしぎんを加え、その全体の上に燦銀いぶしぎんのような光沢と、月光

のような陰影とを漂わせている。——自分は、『彼岸過迄』の『雨の降る日』という篇や、『心』の『先生と遺書』という篇や、または『明暗』の後半などを読むと、殊にそうした感じを深うする。

茲には『ケーベル先生』と題する小品の一節を抄録して見よう。勿論、全体からその一部分を切離したものであるから、全体そのものが与えうるほど強い印象を与えないではあろうが、しかも猶なおある程度までの妙味は感じえられるに相違ない。

先生は昔鴉からすを飼つて居られた。何処から来たか  
分らないのを、餌を遣つて放し飼にしたのである。  
先生と鴉とは妙な因縁いんえんに聞える。此二つを頭の中で  
結び付けると一種の気持が起る。先生が大学図書館  
で、書架の中からポーの全集を引卸ひきおろしたのを見たの  
は昔の事である。先生はポーもホフマンも好きなの  
だと云う。此夕ゆうべ、其鴉の事を思い出して、あの鴉  
は何うどなりましたと聞いたら、あれは死にました、  
凍えて死にました、寒い晩に庭の木の枝に留まった  
まんま翌日あくるひになると死んでいましたと答えられた。

鴉ついでの序こうもりに蝙蝠の話が出た。安倍君が蝙蝠は懐スケプ疑ティツクな鳥だというから、何故と反問したら薄暗がりに、はたはた飛んでいいるからと、謎の様な答をした。余は蝙蝠の翼はねが好だと云った。先生は、あれは悪魔の翼だと云った。成程画えにある悪魔は何時でも蝙蝠の羽根を脊負しよっている。

其時、夕暮の窓際に近く茅蝸ひぐらしが来て、朗らかに鋭い声を立てたので、卓を囲よつたりんだ四人は、しばらくそれイタリアに耳を傾けた。あの鳴声にも伊太利の連想があるでしょうと余は先生に尋ねた。是は先生が少し前に

蜥蜴とかげが美しいと云ったので、青く澄んだ伊太利の空気を思い出させやしませんかと聞いたら、左様そだと答えられたからである。然しかし茅蜩あれの時には、先生は少し首を傾けて、いや彼は伊太利じゃない、何うも伊太利では聞いたことがない様に思うと云われた。

余等よらは、熱い都の中心に誤って点ぜられたとも見える古い家の中で、静かにそんな話をした。夫から菊の話と椿の話と鈴蘭の話をした。果物の話もした。その果物のうちで尤も香りの高い、遠い国から来たレモンの露を搾って水に滴らして飲んだ。珈琲も飲

んだ。凡ての飲料のうちで珈琲が一番旨いという先生の嗜好も聞いた。夫から静かな夜の中に安倍君と二人で出た。

如何にも静かな、落着いた、それでいて非常に芸術的な匂いの高い文章である。すこしもけばけばしいところや、浮づいたところがない。感じが何処までも透明で、且つ平淡ではあるが、印象は極めて鮮かである。——恐らくは、この一文を以て十分先生晩年の文体及び文格を代表せしめるに足りるであろう。

元来、漱石先生は言葉に対して鋭敏な感覚を持った人である。先生の自身の言葉を借りていうと、所謂「意味の微妙あや」(delicate shade of meaning) というものに対して敏感で、自家の感受を表出する上に、最も新鮮な、且つ、最も妥当な語彙を選び、これを最も芸術的な形式の下に醇化しうる人である。しかも先生は先生特有の感受力の所有者であつて、その鋭尖なる神経と、その細緻なる感覚とは、共に外界に纏繞てんじょうする事象の一波一動をも看過することなく、すべてを自家の心境に醸生する芸術的気分の中に融化しうるがために、その文章は常に芳烈

なる香に充ち、その叙述は常に複雑なる色彩に富んでい  
るのである。

以上は文章の一般的方面に就いての考察であるが、以  
下は特に先生の会話に就いて一言して見よう。

自分は前に『二百十日』を論ずるとき、その全体が殆<sup>ほと</sup>  
んど対話を以て成立していながら、猶<sup>な</sup>お立派に四囲の風  
物を描き出してある所以を説いた。そして『虞美人草』  
に於ける宗近と糸子との対話を推奨し、先生には慥<sup>たし</sup>かに  
戯曲家としての要格が備わっていることをも云った。実  
際自分の見るところを以てすると、わが最近に於ける多



数作家の中に在って、稍先生の対話的技倆に匹敵しうるものは、僅かに尾崎紅葉一人あるだけである。併し、紅葉の対話の甘さは単に気が利いているというに過ぎないのであるが、先生の対話に在ってはそうでない。勿論、気は利いているが、その気の利いたところに変化がある。曲折がある。しかも、その変化、その曲折の下に一種の趣を蔵している。従って、読者は不知不識しらずしらずの間に対話の発展を追蹤ついでしよして、意外なところまで引摺られた揚句にはつとずる。宛あなかも戯曲を読んでいるがごとき気持である。

例の『虞美人草』に於ける宗近と糸子との対話は、その発端が次ぎのような形式を以て始まっている。

「今日は勉強だね。珍らしい。何だい」といきなり机の横へ坐り込む。糸子はぱたりと本を伏せた。伏せた上へ肉の附いた丸い手を置く。

「何でもありませんよ」

「何でもない本を読むなんて、天下の逸民だね」

「どうせ、そうよ」

「手を放したって好いじゃないか。丸で散らしまるでも

取った様だ」

「散らしでも何でも好くつてよ。後生だから彼方あつちへ行つて頂戴」

「大變邪魔にするね。糸公、阿父おとっさんが、そう云つてたぜ」

「何て」

「糸はちつと女大学読めば好いのに、近頃は恋愛小説ばかり読んでてまことに困るつて」

「あら嘘ばっかり。私か何時そんなものを読んで」  
「兄さんは知らないよ。阿父おとうさんがそう云うんだか

「ら

「嘘よ。阿父様がそんな事を仰るものですか」

「そうかい。だって、人が来ると読みかけた本を伏せて、榊落し見た様ように一生懸命に抑えている所を以て見ると、阿父さんの云う所も万更嘘まんぎらとも思えないじゃないか」

「嘘ですよ。嘘だって云うのに、あなたも余っ程卑劣な方ね」

「卑劣は一大痛棒だね。注意人物の売国奴じゃないかハハハハ」

「だって人の云う事を信用なさらないんですもの。そんなら証拠を見せて上げましょうか。ね。待っていらっしやいよ」

糸子は抑えた本を袖で隠さん許ばかりに、机から手許へ引き取って兄の見えぬ様に帯の影に忍ばした。

「掬り替えちや不可いけないぜ」

「まあ黙って、待って居らっしやい」

糸子は兄の眼を掠めて、長い袖の下に隠した本を、頻しきりに細工していたが、やがて「ほら」と上へ出す。

両手で叮嚀ていねいに抑えた頁の、残る一寸角いっすんかくの真中に朱

印が見える。

「見留みとめじゃないか。なんだ——甲野」

「分ったでしょう」

「借りたのかい」

「ええ、恋愛小説じゃないでしょう」

「種を見せない以上は何とも云えないが、まあ勘弁してやろう。時に糸公御前今年幾いくつ歳になるね」

「当てて御覧なさい」

「当てて見ないだって区役所へ行きや、すぐ分る事だが、一寸参考の為に聞いて見るんだよ。隠さずに

云う方が御前の利益だ」

「隠さずに云う方がだって、何だか悪い事でもした様ね。私厭だわ、そんなに強迫されて云うのは」

「ハハハハ流石さすが哲学者の御弟子丈だけあって、容易に権威に服従しない所が感心だ。じゃ改めて伺うが、取とつて御幾歳ですか」

「そんな茶化したって誰が云うもんですか」

「困ったな。叮嚀に云えば云うで怒るし。——一だつたかね。二かい」

「大方そんな所でしよう」

「判然しないのか。自分の年が判然しない様じゃ、兄さんも少々心細いな。とにかく十代じゃないね」  
「余計な御世話じゃありませんか。人の年齢としなんぞ聞いて。——それを聞いて何になさるの」

「なに別の用でもないが、実は糸公を御嫁にやろうと思つてさ」

冗談半分に相手になつて、調戯からかわれていた妹の様子は突然と変つた。熱い石を氷の上に置くと見る見る冷めて来る。糸子は一度に元気を放散した。同時に陽気な眼を陰に俯せて、畳の眼を勘定し出した。



何処まで行っても際限がないから、この辺で一先ひとまず切り上げることにするが、今自分が抜抄しただけのところからでも、先生の対話に対する卓越した技倆は、十分これを覗い知ることが出来るであろう。如何にも自由である。如何にも円転滑脱かつだつである。そして、その自由であり、その円転滑脱である中に、汲めども猶なお尽きないほどの情味と、蔽えども猶お隠しえないほどの真摯の気とがある。しかも、この対話の操縦駆使に依って、先生はその作品の上に一種の趣を添出するばかりでなく、さらにそ

の作品の有する筋の発展に対し、極めて重要な、且つ、極めて必然な役目を演ぜしめていられる。その点に於いて、自分は特に先生の技巧的卓越を承認するものである。

先生の対話に於けるこの種の傾向は、『三四郎』、『それから』などに於いても遺憾なく発揮されている。殊に、

『三四郎』に於ける三四郎と美禰子との対話や、『それから』に於ける代助と三千代との対話は、その対話の表裏に纏絡てんらくする感情と気持とが残りなく現れていて、それらの作品に於ける最も生彩ある部分を形作っている。

——また、これは作品の本筋とはあまり深い関係を持つ

てはいないが、『三四郎』に於ける三四郎と与次郎との対話や、『それから』に於ける代助と門野かどのとの対話なども、対話そのものとして非常に面白いと思う。具体的に云うと、先生は一言一句の対話の中にも、猶お対話者それ自身の性格を活潑潑地はつちに躍動させて、読者をして思わず拍掌はくしよう喝采せしめるだけの靈腕れいわんを持っていられる。

併し、先生の作品が——否、先生の作品というよりも寧むしろ先生の態度がと云った方がいい。——その先生の態度が漸次にリアリスチックな色を加えて来るとともに、先生の対話に於ける形式や本質も、また、漸次に弁証的な

調子を増して来た。例えば『彼岸過迄』に於ける須永すながと千代子との対話の中にも、そういうところがかなり多分に見えているように思うが、『行人』の結末に於ける「塵勞」と題する篇に於いては殊に著しい。それが最後の大作『明暗』に至って、殆んど最高潮に達しているのである。

『明暗』を読んだものには何人と雖いえんども直ちに気が付くように、この作品の最も主要な骨組を形作っているものは対話である。敢て誇張した言葉を使うと、『明暗』の半ばを領略するものは対話であつて、残りの半を司配す

るものは心理描写であると云っていいかも知れない。しかも、その対話の大部分は極めて弁証的な特色を持っていて、ある一人とある一人との対話は、常に相互間の胸臆に秘められたる秘密を捻じ取ろうとする不断の論争である。この点に於いて、『明暗』の対話は一種の探究であり、且つ、一種の実験である。

しかも、この作品にあつては、先生のこれまでの作品にあまり見かけなかつた自問自答という形式が採用せられてゐる。それが最初に表れているのは第十三章であるが、その後にも随所に応用せられていて、対話と

等しく作者の弁証的使命を尽している。例えば百七十九頁から百八十頁、二百八十二頁から二百八十四頁、及び六百六十五頁から六百六十七、八頁に亘っては、随分長々しい自問自答があつて、その全体の形式が何となくドストエフスキのそれを思わせる。——ドストエフスキと云うと、その対話の各節の素張しく長い点も、また、両者の間に存する一種の類似に想い到らせるところがある。

先生の作品、特に『行人』や『明暗』などを讀むと、その対話の漸次発展して行く形式の上に非常な興味があ

る。前に抄録した『虞美人草』の対話などに徴してもある程度までは明かなように、先生の対話は、その発端が極めて平調に進んでいる。云わば緩漫とも悠揚ともいふべき趣を備えているが、中頃に至って稍や露骨な鋒銚ほうぼうを現して来るとともに、その対話の調子も漸次熱を帯びて来る。それが最後に至ると白熱の程度まで燃え上って、所謂対話の発展もその最高潮に到達するのであるが、その最高潮に至って突然ふつとりと断れて終しまう。勿論、読者の頭には「今一息」という欲求もあれば、また、何となく物足りないという不満足もあるが、作者は毫もそれ

に頓着しようとしなない。ひらりと身体を交かわしたまま、顧みて他を云うという調子である。従って、幾分不徹底な嫌いもないではないが、それよりも寧ろ、より多くの余韻というものを感じさせる。『明暗』などにあつては、先生の対話が随分烈しい言葉の投げ合いを演じているようでありながら、それでいて余り棘々しい感じを与えない所以は、全くこの余韻に依つて調整せられているからであろう。







日本文学電子図書館

---

文章—文体・文格

著 者：赤木桁平

制作者：宮澤一郎

底 本：「夏目漱石」

講談社学術文庫、講談社

2015年12月10日 第1刷発行

---

日本文学電子図書館